

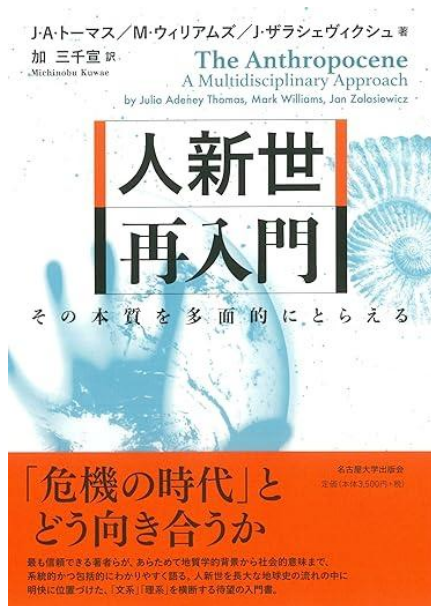
「人新世」再考

「LRRI 会員&役員だより」（2023年1月号）で『“人新世”のはじまり』という視座』：令和5年を迎えて』という小文をお届けしました（ご参考のため、本小文とともに添付いたします）。

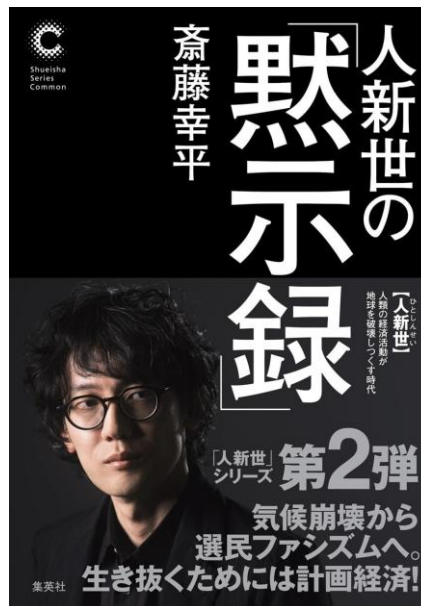
この小文の中で、齋藤幸平著『人新世の「資本論」』（集英社新書、2020）を紹介して「人新世」について下記のような解説文を掲載しました。

人新世（ひとしんせい、あるいは、じんしんせい）：国際地質科学連合（IUGS）が是非を議論している、“環境危機の時代”を象徴する学術用語。我が国では、大分県沖・別府湾で検証のための調査が行なわれている（読売新聞、令和4年11月27日朝刊による）。

その後分かったことですが、最近の書籍（J.A. トーマス他著、加 三千宣訳：人新世再入門、名古屋大学出版会、2025）によりますと、国際地質科学連合（IUGS）の第四紀層序小委員会は、2024年3月5日に“地質年代尺度としての人新世を否決した”とのこと。それでも、本書の著者と訳者を中心とする人新世作業部会（AWG）は、「実在する人新世」の実証を試み続けています。筆者は本著書を熟読してこの試みに賛同の意を強く抱きました。その理由を考えてみましょう。



（左） J.A. トーマス他著、加 三千宣訳：人新世再入門、名古屋大学出版会、2025)



（右） 齋藤幸平著：『人新世の「黙示録」』（集英社、2026）

この書籍の「序文」と「第 8 章人新世の実存的課題」から得られる結論をわかりやすく表現しますと、以下のようになります。

人類のあくなき欲望の追求の下、無限の成長を目指し続けた結果、地球環境は後戻りのできない事態に差しかかっている。地球の未来はもはや近代が約束したような無限の可能性を提供するものではない。その代わりに、私たちは、非常に限られた選択肢に直面している。新たな地球の状況に合わせて根本的に異なる社会を創造するか、あるいは危険を冒してでも現状を継続するかのどちらかである。

斎藤幸平氏は“人新世シリーズ第 2 弾”『人新世の「黙示録」』（集英社、2026）（前掲）でこのことを“破滅への行進”という過激な言葉で表現しながらも、この困難を乗り越える方策を提言しています。筆者はこの提言の多くに共鳴しています。これらが AWG の試みに賛同する理由です。

上記を世界の人々への問いかけと位置付けるとしても、これをどう考えるか（遠い先のことより、いま、抱えている問題を解決しなければ、等々）は個々人の問題ですが、おそらく、“**問われている危険性は不確実なことなので現状を継続する**”ということが多数決になるのでは、と想像します。ワレワレ個人は、直面する生活に専念するとしても、子供・孫・ひ孫の世代を頭において、“段田安則（俳優）（写真参照） & Rockon Social Club”（ロックオン・ソーシャル・クラブ）による歌「B・A・N」の歌詞の一部

短くも長くても 命はひとつ
300 歳まで生きる 事はできやしない
後悔したり ときめいたり 残された時間で
世界にイイことしようぜ

との呼びかけくらいには応える気持ちは持っていきたいと思うのですが
皆さまはどうお考えでしょうか。



<NHK “SONGS” から、
中央が段田安則>

生きるほど 楽しきことが 次々と
人生 100 年 短かくてあり

草花の 歌が聞こえて くるような
雨上がりの朝 爽やかに



<散歩道に咲く紫陽花、中央の写真は無関係>

(令和 8 年 7 月 1 日, 代表理事 安原一哉)